

雨に滲む先に、

大河内 葵

国語の授業で、小説の天気と主人公の気持ちは相関している、と聞いた時ものすごく納得したことを覚えている。

確かに冒険モノの映画のクライマックス、主人公が戦い終わった途端に嵐が止んで陽が戻ったり、

恋愛ものでは雨の中で泣いて帰っていたり。

こうやって天気に語らせることで、登場人物の気持ちを一から十まで説明しないで感じとってもらおう、

とのことだが、もしそうだとしたら、梅雨を舞台にした小説は書きにくいだろうなあと思う。ほぼ毎日シトシト、時にはザァザァと雨に降られては序章から終章まで主人公はずっと落ち込んだままだ。

すりガラスの窓越しにも外の雨が激しいことがわかるくらい、ガラスを伝い落ちる雨雫の流れは早い。

「絢、帰らないの？」

部室の窓からぼーっと外を見ている私に夏南子が声をかける。

「うーん。雨凄いいしどうしようかな、と思って。」

「でも、もう煮詰まっちゃったんでしょ？諦めて帰ったら？夜まで雨は止まないみたいだし。」

夏南子と私は美術部で出会った。

ザ・文化系の私は部活見学で花道部や文芸部などとにかくインドアなものばかり回っていたが、その各教室で夏南子と私はひたすら会い続けていたため、

「文化部まわってるの？」

と私が声をかけたのが始まりだ。

「まあ、そうなんだけど……」

「……そうなんだけど？」

言いにくそうにちょっと言葉を詰まらせたのを見て、声かけたのは失敗だったかなあと少しドキドキした。

「相楽さんを追いかけてみてて……えーと、変な意味じゃないからね？」

夏南子の二言目の衝撃というか謎加減に、多分私は怪訝な顔をしていたのだと思う。

「本当に変な意味じゃなくて、最初に美術部で相楽さんを見かけた時、
『運動部にいそうな子なのに美術部とか見るんだ。』って思って。

しかもその後も花道部にもいて、インドアな所ばかり見てるから、不思議で。つい。」

「あー、私見た目は体育会っぽいもんね。」

「それに運動出来る人でしょ？ 中学の時、地域新聞に載ってたし。」

「えっ！？ あの記事なんで知ってるの??」

夏南子の中学校はかなりスポーツに力を入れているところで、案の定中学でも新聞部という文化部所属だったため、校内新聞のネタに読んでいたのだそう。

「今回は新聞部はいいの？」

「新聞に思入れがある訳じゃなくて、新聞部の部室、眺めが一番良かったから。」

部活を部室の眺めで決めるというのは初めて聞いた理由だったが
そんな理由で仲よくなり、せっかくならと同じ部活に入って今に至る。

「で、絢は帰るの？」

「うーん。煮詰まったなりにもう少し悩んでみる。」

「強情だなあ（笑） じゃあお先！」

「じゃねー。」

私は夏南子を見送ると、もう一度窓の外を眺める。

もう少し、と言って30分ほど考えているつもりだったが、いつの間にか1時間ほど経ってしまっていた。

結局筆を進めることも出来ず、新しい絵に切り替えることも出来ず、

「夏南子の言う通り、帰っても変わらなかったか。」

おちる

絵を片付けて部室を出ると、暗くなった廊下の先に影が見える。

なんで暗くなった廊下ってこんな怖いのかなあ……………

校内だからそんな変な人がいるとは思えないが、小さい頃に見た学校の怪談のせいでなんだか薄気味悪いイメージがある。

「絢、どんだけ待たせんだよ？」

「うわあ、影がしゃべったっ！」

「いや、影じゃなくて人だから、っていうか俺だし。」

影の正体は当たり前だが、人だった。

一学年上の啓太、と言っても幼馴染なので呼び捨てなのだが。

「というか、なんで待ってるの？」

「……おまえ携帯見た？」

ゴソゴソと携帯を出すと啓太からLINEが来ており、玄関で待ってる、とあった。

「今日、約束したっけ？」

「俺がメールでな。」

「なんかあったっけ、今日？」

「オヤジが帰りにちょっと寄ってけて。んで、せっかくだからお前連れてこいって言われた。」

「なーる。……お待たせしました。」

「じゃあ行くか。」

駅までの道を傘を並べて歩く。

ようやく駅までついた時には二人とも足元がビショビショだった。

「帰るまでには雨もう少しマシになるかなあって思ったんだけどね。」

「梅雨だから無理だろ。」

「まあそうだよな。」

「……………雨の日ってさ、ちょっとテンション上がらね？」

「普通テンション上がらないっていうよね、ここは。」

啓太はちょっと昔からズレてるというか、たまに突拍子もないことを言う。
普段は黙ってればイケメンだし、クールを装っているが仲間内ではかなりのいじられキャラだ。

「で、テンションが上がる理由とは？」
「部活の練習が室内になるから定時で帰れる！」
「たんじゅーん！没！他の理由考えなさあーい（笑）」
「お前先輩に向かってどんな口聞いてんだよー。」
「別に年齢は同じだもん。」

でも、本当は気付いている。
啓太のお父さんの所へ行く時は、少なからず、いやかなり緊張している。
それを感じとってわざとおちゃらけた態度をとってくれてるのだと。
到着するまで啓太は延々とくだらない話ばかりしていてくれた。

「んじゃ、俺このままロビーいるから。18時で予約入ってるから入っていいってさ。」
「ありがと。」

啓太のお父さんは開業医ではあるが元々大学病院で長くやっていたこともあり
地域ではかなり有名なお医者さまだ。

「遅くなりました。お願いします。」
「ああ、絢ちゃん。学校お疲れ様。美術展の出品、近いんだって？」
「そうなんですけど、なんか煮詰まっちゃって（笑）」
「悩んだほうが芸術は良くなるよ～」

啓太のお父さんはお医者さまらしいオーラよりも幼馴染のお父さんという雰囲気を出そうと
努めてくれているのだろうなあと思うが、やはり手元の結果を見ると緊張してしまう。

「じゃあ、まあ結果を話そうか。」
「お願いします。」

中学まで大会に出るほど運動をしていた私が美術部にいる理由は、一つ。
運動をしてはいけなくなったからである。
夏南子も知っていた地区大会で優勝し、全国大会に向けてひたすら練習にあけくれた日々。
抜群のコンディションで全国大会を迎え、入賞もありえるのではないかと心のどこかで期待した日。

スタートした直後、審判のしまい忘れた道具がトラックに残っており、運悪く引っかかって転びながら

周りの景色がスローモーションに見え、悲鳴をバックに聞きながら

「そういえばドラマでもこういうシーンってスローモーションだよなあ。」
なんて思いながらトラックに倒れ込んだことを覚えている。

そこから病院で10日後に目が覚めるまでの記憶はない。

元々不整脈があったためか、突然の転倒が原因なのかはわからないが
心室細動を起こしたとかでだいぶ生命の危機にあったらしい。

その時の検査からか、不整脈含めて心臓は要経過観察になってしまったのである。
そして一旦不調になると中々本調子になってくれないうらしく、入退院を繰り返している内に
一年ダブってしまったという訳である。

「結果から言うと・・・微妙だね。」

「やっぱり。」

「自覚あった？」

「最近心拍数が一気にあがって意識が怪しくなることもあったので。」

「うーん。。。結果を見る限りは入院して安静に過ごして欲しいかな。

学校は全くダメとは言わないけど、出来るだけ安静にして考えるとね。」

「結果持って帰って親と話してみます。明日お返事する形でいいですか？」

「うん、ちゃんと絢ちゃんのご両親と話してきて。一応僕も連絡はするから。」

「ありがとうございます。」

なるべく悲しい表情はしないように、心の蓋をぎゅっとしめてお辞儀をする。
それでもロビーの啓太の所まで蓋は持たなかった。

「屋上行こうぜ？」

啓太に手を引かれて屋上に着くまで声だけは我慢した。
ぽたぽたと落ちる涙だけは我慢出来なかったが。

とどまる

啓太のお父さんは大学病院で心臓外科をしていたこともあり、この病院には同じように心臓の重い疾患を抱える人が多くいる。多くの人は運動禁止になり、外に出る機会が少ない。

そんな人達のために屋上に休憩室が作られており、多くの患者がそこで日向ぼっこをしているのを見る。だがそんな休憩室も、雨の降りしきる、しかも薄暗い夕方には誰もいない。

啓太は一番窓に近いベンチに私を座らせると頭をポンポンと子供のように撫でる。

「・・・けいた。」

「いいよ、しゃべんなくて。」

「・・・学校、いきたい・・・走りたい・・・普通にしたい。」

「行こうぜ、学校。もれなく俺の送り迎えもつけてやるぜ？」

「・・・ばーか。」

恐らく啓太はお父さんから大まかな理由を聞いていたのだと思う。

そうじゃなくても、お父さんから「連れてこい」と言われた時点で結果が良くないことはわかっていたからこそ、ロビーで待っていてくれたのだと思う。

「俺はさ、絢が走ってるそこ見んのが好きだったわけ。」

絢が歩いてるとこもさ、走ってるのをスローモーションで見ると考えたらいいんだろ？（笑）そしてら送り迎えとか最適じゃんか。」

「もう、全然違うよ、それ！」

「じゃああれか、歩いてるのを早回しでみて走ってるように考えたらいいのか。」

「それも違うし！競歩じゃあるまいし。」

「・・・泣き止んだ？」

「・・・啓太がしょうもないこと一杯言ってくれたからね。」

入退院を繰り返してるのであれば、結果が少し悪かったくらいで何を今更、と思うかもしれない。

ただ前回退院時に、次入院するとしたら少しは覚悟して欲しい、と言われていた。

もちろん医療は進歩するからこの言葉が必ずというわけではないけど、と啓太のお父さんは笑いながら付け足してくれたが、その言葉は私の中でかなりずっしりと残っていた。

「一応念のため言っておくと、断ってるのは絢だからね？」

「・・・えっと。」

「俺は前から絢のこと好きだって言ってるけど、彼女にはなれないって言ってるのは絢だってこと。」

「な、なんで今それを!？」

「俺はね、『体調が心配だから送り迎え』じゃなくても、単に一緒に帰ったりとかしたい訳ですよ。」

「は、はい。」

「だから、ダメって言われなかったら体調が心配という建前でも構わないんで行き帰りどうですか？」

「な、なぜ敬語？」

「返事は？」

「でもそれは付き合っていると勘違いされるでしょ？啓太にとって良くない。」

「いや、それは俺にとっては願ったり叶ったりなんだけど。」

「・・・・・・・・。」

「絢はさ、自分が死ぬかもって思って、負担かけたくないから付き合ったりしちゃダメって思ってるわけでしょ。」

「・・・・・・・・。」

「主治医の息子だから心配してるとかじゃないっていうのはもう言ってるよね。」

「・・・うん。」

「さっきも言ったけど、俺は走ってる絢のカッコよさが好きなわけ。」

「でも今の私は走れない。」

「だから、絢が走れるようになるためならなんだってしたい。また満面の笑みで走ってる絢が見たい。」

「ズルイよ、啓太は。」

黙ってればイケメンが間近で真剣な顔で告白してきてグラつかない人がいたら見てみたい。これをもう何回も断ってる私の忍耐力を誰も褒めてくれないのが悲しいところだが。

「だから俺さ、オヤジみたいに心臓外科医になりたいんだ。」

「だめだよ？そんな簡単に将来きめたら。」

「でも俺ならなれそうな気がしない？手先器用だし、オヤジの後継ぎだっているだろ？」

「まあ後半は当たってる（笑）」

結果を聞いて、もうこの心臓もガタが来たかと落ち込んでいた気分がだいぶ持ち直してきたのはきっと啓太のお陰なのだと思う。

啓太の申し出にYESと答えられたらいいのに、と毎回思う。

そしてそう思いながら毎回NOと答えている自分がいる。

ドラマではないが、もし自分に何かあった時に申し訳ない気がしてしまう。

でも正直な所、精神的に啓太に頼りきりな自分もいて、付き合うか付き合わないかは最早表面的な名前が変わるだけなのではないかと思う自分もいる。

「私だって啓太のこと好きなんだから。」

周りの音さえ聞こえないくらいの大雨にそっと呟くが、啓太の背中に届く前に雨水が吸い取ってしまった。

とける

結局両親とも話合った結果、美術展の出品までは入院を待ってもらうことにした。

「絢、気合入りすぎじゃない（笑）？」

「出品までは学校いられるからさ、なるべく長く校舎の空気吸いたくて（笑）」

「また入院だもんねー。でも私押しかけまくるからね？」

「あの病院、眺めいいからでしょ？」

「あー、でも宮崎先輩いたらちゃんと帰るから大丈夫♡」

「こら、夏南子ー。」

啓太はたまに美術部にも遊びにくるので夏南子も面識はある。

そしてなぜ一学年上のサッカー一部の、しかも有名な先輩が親しげに来るのかという点でしっかりと問い詰められ、白状した次第である。

「だから付き合っていないからね？」

「でもさ、絢だって宮崎先輩のこと好きじゃん。」

「なんかあった時に責任取れない。」

「ぶっ・・・あははははは！！」

「ちょ、なんでそんな爆笑？！

「その台詞、なんか男の人みたいで。」

「///もう！ 私は絵描く！」

これ以上夏南子に絡まれるとボロが出そうなので、一生懸命作品に集中する。

よく中学の頃陸上部だったのに高校で美術部に衣替えしたので、振り幅に驚かれることがある。確かに昔は美術部はセンスのある人が入るところだと思っていた。

でも、高校になってなんとなく自分のこれから先が見えにくくなってきた時、自分が生きていることを

どうやったら残せるのだろうと考えるようになった。

写真部などもいいような気はしたが、やはり美術部が一番自分の想いや存在を残すのに良い気がして

絵の才能は全く無視で入部した。

そして覚悟のいる入院を前にしての作品出品。

あれだけ煮詰まっていたのに、ある意味覚悟をしてしまうとテーマは絞れた。

後はひたすら向かうだけだ。

「冗談抜きにしてさ、その作品、宮崎先輩宛でしょ？」

「・・・夏南子だけにしか言わないからね。・・・当たり。」

「遺書みたいに考えてるんだろうけど、そんなの許さないからね？」

「！」

「死んじゃやだって思ってるの宮崎先輩だけじゃないから。

これからも絢の作品みたいし、しゃべりたいのは私もなんだから。」

夏南子はそう言い残して部室を出て行ってしまったが、普段あまり自分の想いを口にだすタイプではない彼女がそこまではっきり言ってくれたことが嬉しくて、いない本人に向かって

「夏南子・・・ありがとう。」

と呟く。

夏南子に当てられた通り、出品する作品のテーマはずばり「恋」である。

「愛」にするか迷ったが、自分の年齢ではまだこの言葉が重たい気がして、いつかこの言葉をテーマに出来る時が来たらいいなという想いも込めてもう少し若者っぽい「恋」にした。

スポーツをしている人を遠くから眺めている絵。

競技者も眺めている人も性別は取ってわからないような抽象的な絵にすることで自分のスポーツをもう一度したいというスポーツへの恋というのが建前の説明だが、美術部の部室からグラウンドの啓太をちよくちよく眺めている自分でもあったりする。

「こんな感じかなあ・・・とりあえず明日もう一回見てから考えるか。」

出来上がったような、もう少し描けるような、なんとなくこれが終わったら学校に来なくなることも

相まっていまいち完成を決められない。

絵の具のバケツを片そうと席を立った瞬間、心臓から嫌な音が聞こえ始めた。

前回意識が飛びそうになった時と同じものすごい早い心拍音。

冷や汗を流しながら、なんとか美術室のドアを開ける。

このまま部室で倒れたら誰も見つけてくれない。

ドアにしがみついて廊下に出られない私の前に急に啓太が現れる。

「絢！」

「けい・・・た。」

倒れ込んだ私を抱きとめると、啓太は速攻で救急車を呼び、次の電話で実家の病院に連絡する。
啓太に抱きとめられて安心したせいか、心臓の限界かそこで意識が途切れた。

「起きたか？」

目が覚めた時、集中治療室かと思ったが、意外にも普通の病室だった。
傍には啓太がちゃんと座っててくれた。

「両親には連絡してある。処置が早かったから今回はまあ大丈夫。」

「・・・・・・・・出品してから入院する予定だったんだけどなあ。」

「頑張りすぎだろ、お前。」

「つい、ね。」

「あの時俺が駆けつけなかったら本気でやばかったぞ？」

「ごめん、ありがとう。」

「あの絵さ・・・・・・・・」

「・・・私のやつ？見たの？」

「ちょうど見えた。あの絵の意味聞いていい？」

「分かって聞いてるんでしょ？啓太は。」

「俺はさ、こういう絢の一大事の時にちゃんと横にいられる権利が欲しい。

さっきもさ、夏南子ちゃんが帰りがけに『絢の顔色が良くないから注意してあげて』って言いに来たから

気になって部室の方いったら、アレだろ？

絢が俺を頼ることを申し訳思うのなら、頼るのが当たり前だって思ってほしい。

俺が頼ってほしいって思ってるから尚更。」

正直、啓太があんなにタイミングよく駆けつけたのは不思議だったから、夏南子のお陰だと知って納得した。

きっと切羽詰まっていて、かつ学校に留まりたいという想いに駆られてる私に『顔色が悪いから』と

帰りを促すことができなかったのだろう。

つくづく自分は周りの人に恵まれていると思う。

だからこそ迷惑をかけたくないと思うのは私のワガママなのだろうか。

「あの絵、絢が部室から校庭を見てる絵だよな？そして見てる先は俺・・・・・・・・だよな？」

「・・・・・・・・。」

「たまに校庭から見上げると窓際で絵描いてる絢が見えるんだよ。

目が合わないかなって思っても合うことないんだけどさ（笑）。

「・・・んで、絵の下のタイトルが『恋』だろ？おめでとう俺はそういう事だと思うんだけど。」
「・・・・・・・・本当は絵を出品したら入院だったし、今回は覚悟しないと思ってたから。」
「だから、想いを遺書代わりに絵に残しますって？」
「・・・・。」

「絢はさ、迷惑をかけたくないから言いたくないんだろけど。
もしも、本当にそういうことになった時に、本人の口からじゃなく残ったものからそれを知るのって
どんな気持ちだと思う？」

啓太の言葉は優しくだったが、同時に心の蓋をどんどん開けていく言葉でもあった。
気づかないように気づかないように一生懸命隠していたこと。

言われなくてもわかってる。

それでも怖くて気づかないようん見ないようにしてきた。

「それよりかは、もしそういう悲しい結末になるんだとしても。
俺はちゃんと絢の口から聞いて、しっかり自分の思い出に残したい。
それに、死なせるつもりないから、俺。」

啓太に揺らがないよう頑張ってきたつもりだった。

それでも、人生で一回だけ揺らいでもいいですか、神様？

「啓太、後悔しない？」

「絶対しない。後から聞いたって、そんなのもはや両思いじゃないだろ？」

「・・・・・・・・私も好き・・・・・・・・だよ。」

言い終わるか終わらないかのタイミングでぎゅっと、それでも心臓に負担が掛からないようにと
配慮された
力加減で抱きしめられた。

「絢、ほんと強情。これだけ俺のこと頼ってくれてるのに毎回返事はNOだからなあ（笑）」

「啓太、看護婦さんくるから離して・・・・・・・・！」

「やだ。」

「ええー、ちょっと！」

クスクス笑いながらも怒りながら入ってくる看護婦さんと、顔を真っ赤にしてオロオロする私に、
啓太だけはしてやったりと笑っていた。

心臓が治ったわけでも、入院の目処がたったわけでも、新しい治療法ができたわけでもないけど
なぜだかちょっとだけ心が軽くなったような気がした。

想いを絵に残すこともいいけど、言葉にして相手に受け取ってもらうことで
ちょっとだけ重荷を相手にも持ってもらえたからかもしれない。

外は相変わらず梅雨でシトシトと雨が降り続き、天気予報では過去最降雨量の梅雨だとしきりに
繰り返す。

小説は主人公の心情を表すというけど、今日の雨は暖かい雨なのかもしれない。

そう、多分きっと、心の重荷を一緒に背負ってくれる人を見つけた安心の涙。